

鎌倉期南都仏教教団の形成

——西大寺叡尊をめぐる諸問題——

成 田 貞 寛

(仏 教 大 学)

一

鎌倉時代に於ける旧仏教系である法相、華嚴、律等の諸宗に属する南都諸師に於ては、何れも何等かの形で復興をめざし、自らの教学の自己形成にまで高めて行くのであるが、ここに取りあげんとする西大寺叡尊に於ても、従来の見解に従えば、戒律復興に志ざすと共に、それに伴う説戒及び授戒活動、引いては大日、釈迦、文殊、太子等の諸信仰に基づく慈善救済活動をすすめるのであるが、かかる過程に於て、彼を中心とする結合集団なるものを形成せるものと考えられる。故にこれが解明にあたつては、先づ叡尊その人の教学信仰の内実を知ると共に、更には教化活動の実態を知らねばならぬし、時代背景的には、上代以来の仏教々団のあり方、更には鎌倉初期に於ける新興諸宗の初期教団の形態等についての理解をも考慮に入れながら論をすすめねばならぬであらう。

さて、既に諸氏^①によって指摘されている如く、上代にあっては、行基等の如く仏者としての主体的行き方をす

る者もあったが、それ等はむしろ例外にして、僧侶の生活は、僧綱の統制下に僧尼令によって規定せられ、戒律を守り、国家に対する祈禱を以て使命とする極めて他律化されたものであった。即ちその教団の形態は、富裕な經濟を背景とする寺院中心の法制的公的集団であつて、律令制仏教としての性格づけがなされていた。又下つて伝教に創まる天台教団なるものは、律令制仏教に対立して成立したにもかかわらず、十世紀以降は律令制仏教化したと指摘されているから、その教団形態等についても推測されるであらう。

これに対し、鎌倉時代の新興諸宗に於ける初期仏教々団なるものは、如何なる性格形態のものであつたであらうか。諸氏^②の見解によれば、上代からのかかる体制のからを破つて、一人の祖師の人格を中心とする同行者の集団であつて、そこでは人格的結合を以てせられ、私的団体であり、自主的な集団であると言ふことが出来る。即ちこの時代の初期仏教々団なるものは、一人の人格を紐帶としての同行者の結合体であるから、人格こそがその教団の基盤であり、そこにこの時代の特色を見ることが出来るとされている。しかば西大寺叡尊を中心とする教団、即ち叡尊の教にはらまれたる教団としての特殊な様相と理念によって形成せられた教団とは如何なる形態及び性格のものであつたであらうか。又如何なる特性によって形成せられていたのであらうか。

二

さて、叡尊の宗教体験よる教学信仰の中核を求めることは、極めて困難であり、近年に至つて従来の考え方を更新する成果も表はれている^③。たとえば、戒律復興の問題にしても、従来、東大寺大仏前に於ける覺盛等四律師による自誓受戒が、何れも南山宗の再興にありと考えられていたが、叡尊のみは法相宗伝持の遍学三藏所伝の三聚菩薩戒

の復興にあることが明らかにせられ、またその戒観についても、彼れ独自の密教戒律観を持していたことが表明せられている。その他、文殊、釈迦、地藏、太子等の諸信仰と大日信仰との関係等、未解決の問題もあるようである。ともあれ彼の教学信仰、教化活動の総合的理解は今後の課題であるが、今しばらく弟子性海による西大寺興正菩薩御入滅記によって、その御一生涯の行実について窺ってみよう(4)。

「抑先師発心修行七十余回之間、專住闡提之悲願。無願淨利之往生。不嫌惡趣、不簡辺地。只生濟度有緣之所、願救同類等形之生。雖然願大行滿、不願自生。其理必然不可胎疑。何況速憶生前之本誓、恣施自在之利益。豈故背素志哉。加之、依瑜伽之施設、弘菩薩通受戒行。學真言之教理、積加持三昧之薰修。慈尊說法之砌也。詣而可正聰聞。高祖逝化之所、往而可歆值遇。然者知足之上生旁有所願者哉。」

右の前半の文によって理解される所は、叡尊が常に人間関係の革新に力をそそぎ、文殊涅槃經所説の文殊影現利生説(5)、又悲華經所説の釈土成仏説(6)を自らの行くべき道として受容し、大悲闡提の悲願に住せられていることである。又後半の文の示すところは、瑜伽師地論本地分中菩薩地、第十五初持瑜伽処戒品に説く、菩薩の三聚戒を弘宣する旁ら、真言教による加持三昧に住せられ、即身成仏の道を易行として証得せられていることである。これ等のことは、彼の自叙伝である感身学正記や戒律関係を始めてとする顕密に亘る著述、特に諸願文を見ることによって理解せられる所であり、彼の生涯を決定づけたものであると考えられる。しからばかかる教化活動に基づいて形成せられた教団とは如何なる形態性格のものであったであろうか。

これを明らかにするためには、種々の資料によらねばならぬが、弘安三年八月廿六日、彼の弟子達の発願によって造立せられた叡尊八十歳の寿像並に納入文書等を手かりとして、論をすすめることにしよう(7)。

この寿像はその内部に黒書された銘記によって明らかな如く、大仏師法橋、善春、春聖、善実、堯善等の手によって作られたものである。次に納入文書であるが、宝歴十二年（一七六二）、修理の際、追加納入された文書二十八点と、初めからの三十二点とに区別されるが、最初からの重要なものをあげると次の通りである。

一、自誓受戒記一卷。（嘉禎二年丙申九月）その他、別受戒願文（寛元三年九月十三日、家原寺清涼院、文殊堂に於ける願文）。
觀尊等九人による紹隆三宝利樂有情誓願文、（宝治元年五月廿五日）。覺盛等五人による願文、（宝治元年七月一日）。
貞俊願文、（宝治元年七月三日、同宝治元年八月廿二日）。惣持願文、（宝治二年三月八日）。澄慧願文、（文永七年正月十七日、文永九年三月十三日）。

二、西大寺有恩過去帳、一卷。（結縁衆二千三百十人の名を連ぬ）（給持小比丘鏡恵の識語）

三、授菩薩戒弟子交名。（その二）一卷。比丘衆、三八九名。法同沙弥、一二二名。比丘尼衆、一八三名。式刃尼衆、四八名。法同沙弥尼、六〇名。（鏡恵の識語）

四、授菩薩戒弟子交名、（その二）一卷。形同沙弥（過去者名、西大寺、般若寺、大安寺、西林寺、薬師院、浄住寺、春光寺、弘正寺、多田院、教興寺、神願寺、三学院、額安寺の現住）（已上二八〇名）形同沙弥尼（過去者名、法華寺、教聖院、道明寺、光台寺の現在）（已上二三八名）（鏡恵の識語）

五、近住男女交名、一卷。（過去近住男分、西大寺現住男分、過去近住女分、西大寺現住女分）（都合三二五名）（鏡恵語識）

六、西大寺西僧房造営同心合力奉加帳、一卷。（当寺分、海龍王寺分、般若寺分、不退寺分、喜光寺分、鎌倉極楽寺分等、惣都合七百十五貫百五十文。米三石。（鏡恵識語）

七、舍利安置狀、一紙。

八、元寇祈願文殘欠、二紙。

九、供養法日数、一卷。

十、僧尼願文類、十五紙。

十一、敬白文、一紙。(已上願文、十二点)

十二、大仏頂陀羅尼及五種陀羅尼、一卷。

十三、般若波羅蜜多心經その他、一卷。

十四、梵網經その他、一冊。

十五、金光明最勝王經、十卷。

十六、悲華經卷第六、第七、二卷。

十七、般若理趣經、一紙。

十八、法華經、無量義經、普賢經、般若心經等、一箱。

十九、新刪定四分僧戒、一卷。

二十、梵字經典、六冊。

二十一、兩界種子曼荼羅、一紙。(以上經典類十一點)

これ等の文書の外に、金銅舍利塔一基と、上書に「祖師菩薩御父母御遺骨」と記された一包が納入されている。さて、今これ等の資料によって理解される所は、先づ西大寺を中心とする叡尊教団の形態が如何なるものであり、

祖師觀が如何なる性格のものであるかを知りうるであろう。弟子達の発願によって造立せられた祖師像が如何なる目的によって造立せられたであろうか。しかもその前年には安置さるべき西僧坊が造営せられている。勿論、師命永かれと祈つてのことであろうが、納入文書中の西大寺有恩過去帳、授菩薩戒弟子の交名録、西大寺西僧坊造営同心合力奉加帳の末尾の鏡恵の識語や、弟子僧尼の願文によって明かなる如く、偏に弟子達自らが師に従って生々世々に随順修行せんがためであり、断惡修善、菩提心をおこし、永く退転せざらんがための誓いと願いのためであったと考えられる。そこには西大寺を中心とする諸寺の衆徒としての祖師觀が窺はれるのであって、どこまでも一人の人格者、同行先達者として見ていることであり、鏡恵はその師叡尊を以て西大寺衆首大徳と規定し、同門の主としての尊信を以てしている。しかも又そこにこの教団の形態、性格が示されており、先にも一言せる如く、上代以来の富裕な經濟を背景とせる法制的公的集團のからを脱した、一人の祖師の人格を中心とする同行者の私的集團の形態を取るものであり、その教団の性格は律令制による他律化されたものではなく、むしろ律令制のわくを打ち破って、仏者としての主体性に立つ、自主的集團としての性格に基礎づけられていると言ふことが出来ると考えられる。しかもここに特筆さるべきは、この教団が西大寺を中心とする諸寺の衆徒を結集して形成せられていることであり、これ等の衆徒を結合せしめて行く過程に於て、かかる仕方、即ち祖師の造像と結縁交名録の納入によることは、一つの特色であり、同行的集團結合の意識をより強固なものになさしめて行くものであると考えられる。かかる仕方は、叡尊の指導によってなされたと思われる、彼の弟子達の発願にかかる道明寺所蔵、太子孝養像の造立と結縁僧交名録の納入（9）。元興寺極楽坊所蔵、太子孝養像の造立と結縁交名録の納入等（10）の諸例によっても窺はれる所であり、言はば西大寺叡尊教団の体制づくりえの一特色とも言はるべきものであろう。しかば、かかる叡尊を中心とする教団は如何なる特性

をもつ教団であり、またその教団組織の中核としての本尊とは如何なるものとして規定さるべきであらうか。

三

叡尊の理想が十善諸国に遍く、七衆中辺に満つるを以てその理想としていることによって知られる如く、仏子たるの自覺を以て、七衆夫々別解脱律儀戒を堅く守り、菩薩通受戒の実践の上に立つ集団であり、律制を厳守し、嚴肅な中国羯磨の受戒儀式によりながら、梵網十重禁、断惡修善、利生の菩薩道実践の現実化を理想とする集団であるところに、その特性を見ることが出来る。又聖德太子、行基等の先蹤を追ひ、これを讃仰し、文殊、釈迦、地藏、弥勒、虚空藏等の諸菩薩を信仰し、夫々の立場から大衆に結縁せしことも、この教団の特性として挙げることが出来る。特に聖德太子を伝曆に規定する信仰によりながらも、別して東隅仏法の曩祖、娑婆世界の無畏主として尊崇し、随所に太子講を修して結縁せしことも、特色の一つとして挙げることが出来る(11)。また、ここに附言すべきは、叡尊が出家在家に亘る極めて積極的な授戒活動、諸信仰に基づく非人癩人への救済活動を展開せしめ、又他面、持律持戒行即ち三密行なりとの信念に立脚して、利生への活動を展開せしめたことについては、既に一言せし所であるが、かかる積極的活動に向はしめた内的動因、思想的背景ともなったものが如何なるものであったであらうか。叡尊の太子講式表白文には(12)、次の如く説かれている。

弟子等倩以虚妄雲厚、久覆法性之月、幻境風猛鎮起識海之浪。植業種於善惡、受異熟於苦樂、輪廻六趣。善車無始、轉變四生似環無終。或交炎熱而受鉄杖、或臥寒氷而變身色、或交炎熱而困飢苦、或吞鉤針而哀身命、或鷹隼所擊、或虎狼所噬、或八苦所纏、或五衰所逼、如此衆苦經幾劫數、如此果報受幾類形、

三塗苦、人間苦、何所為絶苦集之善邦。上界迷、下界迷、何類為示滅道之導師。生死亦生死、苦海波漫々。
流転亦流転、長夜暗悠々。嗚呼可悲哉、嗚呼可痛哉、何為何為。

右の文によって知られる如く、業報輪廻の思想のあることが看取せられる。これこそ彼の人間観照の深化を推進せしめたものであると考えられる。もともと業報輪廻の説は、対象的に見られる限り、生存の運命的必然性を強調するものであると考えられるが、しかし主体的には、それとは逆に解脱と自由のためのものであり、常に覚醒への呼びかけとして説かれたものであると考えられる。罪業への自覚と懺悔、罪の連帯性への自覚は、自他の罪を悲しみ、自他の罪苦をあわれみ慈しむで、自他を共に解放の世界に至らしめんとするもので、そこには必ず危機感を伴うものである。かかる危機感こそ、殺生禁断、非人癩人への救済活動の積極化を促したものである。ともあれ、生々世々、生存の於ては、自我愛は全く超克せられて、自他共に無我愛のかがやきの中に蘇るのである。ともあれ、生々世々、生存の事実性を直視する者にとって、業報輪廻の思想ほど吾々の迷妄の境涯を開かしめんとするものはない。叡尊を中心とするこの教団の教化救済活動の基底にかかる流れのあることを感ぜざるを得ないと考えられる。しからば、次にこの教団の構成組織の中、特に本尊について考察を進めよう。

この教団が西大寺を中心とする西大寺系諸寺の同行者を中心とする集団であることは、申すまでもなく、又集団の依処たる諸寺が官寺でも氏寺でもなく、修道院的なものであり、世俗的権力の介入を許さぬ無縁のものを理想としていたことは明らかである¹³。又その経済的基盤も同行者各自の醸出又は叡尊の徳を慕って任意寄附されたものによったことも明らかである¹⁴。その他教団運営の方式等、種々のことが挙げられうると考えられるが、この教団の本尊について考察をすすめることにしよう。さてこの教団の本尊をいかなるものとして設定するかは、重要な課題の

一つであると考えられる。現在西大寺系諸寺の本尊としては、釈迦如来像を安置する所もあれば、文殊菩薩像、地藏菩薩等、その形式は種々不同である。今叡尊の教学信仰及び実践活動に即して考察する時、重点を何れにおくかに随つてその見解も異つて来ると考えられるが、建長元年（一二四九）四月、叡尊の発願によつて造立せられ四王堂に安置、現在西大寺金堂に安置されている清凉寺式釈迦如来像を以て本尊と規定せねばならぬと考えらる。しかば、如何なる思想的根拠を背景とする釈迦如来であるであろうか。換言すれば、この教団の人々は如何なる釈迦如来としてこれを信仰し礼拝の対象としているであろうか。結論的に言えば、先にも一言せる如く、叡尊の実践活動の思想的根拠となつた悲華經所説の釈迦如来であると考えられるが、しかし只一類のものとして規定することは早計のように思われる。されば先づ、悲華經所説の釈迦如来とは如何なる如来として規定さるべきであろうか。貞慶の唐招提寺釈迦念仏会の願文によつて窺うことが最も捷徑であると考えられる（15）。

「夫娑婆十惡之境、諸仏棄而無出。賢劫五濁之末、群生沈而難浮。唯我本師釈迦牟尼如来、常廻此難忍之土、独救其難化之生。蓋大悲憐極惡之至。本願撰穢土之誓也。恩德廣大、殆不可述。……」

夫釈迦如来者、此界之慈父。我等之悲母也。一代之教主也。四衆之本師也。一体兼四德、都無其類。不是一期之因縁、遠答多生之引摂。只不以前之恩德、必有当生之值遇。十方有仏土、世尊之所示。余仏可歸依、本師之所勸也。……

と説いている。釈迦如来こそ一体四徳を兼ねるものであり、娑婆十惡の能化主、賢劫五濁の導師であり、その大悲は極惡を憐むの至れるもので、その本願は穢土を摂するものであると言うのである。この故に機縁我等に極めて深く、只一期の因縁のみならず、多生の引摂に答うるものであると規定されている。即ち教主として、教主として、本師と

しての釈迦如来を一体不離なるものとして観じ、三世に亘る因縁浅からざるものとして、しかも五百の大願を誓われし如来として規定している所にその特色を見ることが出来る。叡尊が社会救済活動の思想的源流を悲華經諸菩薩本授記品に求めて行ったことは寛元三年九月、家原寺に於ける如法別受の苾芻戒を始行する時の願文¹⁶、宝治元年の西大寺に於ける夏安居の発願文等に於て¹⁷、明らかであり、釈迦の別願に随順して、無聞非法の衆生をして、菩薩行を修せしめ、諸仏の世界に引導せんとの堅い決意を表明しているから、如何に叡尊が悲華經所説の釈迦如来に帰依していたかを推測することが出来る。しかし又、叡尊は真言密教を相承しているから何等かの形で大日如来と釈迦如来との關係を解決していたと考えられる。古来、大釈同体、別体の説は種々論ぜられ、その批判説も展開せられ¹⁸、大日如来と釈迦如来とを体と用、全体と部分との關係として論ぜられ、畢竟、体を離れた用はなく、部分を離れた全体もない故に、用より体に入り、分より全に進むことによって、初めてそこに真の意味と価値とが生じて来ると論ぜられているが、何れにしても、叡尊教団の釈迦如来觀の背景には、常に大日如来を考慮に入れておくべきであると考えられる。

以上、西大寺叡尊教団の形態と性格について、上代及び中世初期に於ける諸教団の形態性格をかえりみながら検討し、叡尊と言う一人格を中心とする私的、自主的教団にして、中世教団としての共通性を基底にたたえながらも、この教団が律儀戒を厳守し、断惡修善、三聚通受の菩薩道実践集団としての特性をもつものなることを指摘して来たのである。しかもこの教団が利生活動の積極化を進めて行く背景に、業報輪廻の思想のあることを指摘し、この思想の本来の意味を考え、更にこの教団の本尊論について言及し、悲華經所説の釈迦如来の内容をもつものなるものこそ、この教団としてふさわしきものであり、他面、大日如来との關係をも考慮に入れねばならぬことを指摘したのである。

従来この教団の教化救済活動について種々の評価が与えられているが⁽¹⁹⁾、仏者集団としての本来の意味を考察しなければ、真の評価を誤るものであり、この教団の本質をも見きわめることが困難であることを附言し、結語とする。

- (1)(2) 宮崎円遵著「中世仏教教団の基盤」(印度学仏教学研究、第三卷、第一号所収)
- (3) 徳田明本著「南山律宗としての西大寺派について」(南都仏教第十八号所収)
- (4) 拙著「西大寺興正菩薩御入滅記について」(印度学仏教学研究、第五卷、第二号所収)
- (5) 宮崎円遵著「文殊信仰と利生事業」(中世仏教と庶民生活所収)
- (6) 拙著「鎌倉期南都諸師の釈迦如来観と利生事業」(仏教大学研究紀要、第四十四、四十五合巻号所収)
- (7) 奈良国立文化財研究所篇「西大寺釈尊伝記集成」三三七頁参照
- (8) 同上 三五九頁には
為生々世々随順修行断惡修善發菩提心永不退転故記名字所納西大寺衆首大徳真影之内也
弘安三年庚辰九月十日給侍小比丘鏡恵
- (9) 小林剛、杉山二郎共著「道明寺聖徳太子像」(文化史論叢所収)(昭和三十五年二月十日發行)
- (10) 杉山二郎著「元興寺極楽寺坊聖徳太子像」(仏教芸術、三十九号所収)
- (11) 拙著「鎌倉期南都諸師の太子観」(印度学仏教学研究第十二卷第二号所収)
- (12) 聖徳太子全集第五、六九頁(聖徳太子奉讃会篇龍吟社發行)
- (13) 関東往還記、(奈良国立文化財研究所篇、西大寺釈尊伝記集成所収)七三頁参照。釈尊が称名寺止住を廃して、無縁の寺、釈迦堂を選んだことによっても明らかである。
- (14) 西大寺田園目録、上記釈尊伝記集成、四一二頁参照。
- (15) 大日本仏教全書(戒律伝来記等記載篇)二二頁参照。
- (16) 西大寺釈尊伝記集成(上記篇)一二七頁参照。
- (17) 同上 一三三頁参照。

（18） 高神寛昇著「仏身論」（密教概論所収）二一九頁以下参照

（19） 和島芳男著「叡尊・忍性」、持戒の宗教の項、その他、多くの識者によって論ぜられている。